

階層構造、樹冠投影図が記録され、胸高直径、樹高はひきつづいて測定対象とされるものである。

森林施業は林冠層を疎開させ、林床をかなり攪乱する。林内環境の変化が植生にどのような影響を与えるのか。下層植生が陽性化するのは一時的なものかどうか。上層植生への影響は樹種交代、優占種の交代にまでおよぶのかどうか、植生の回復過程はどのような経過をたどるのか、などの点が各施業区の永久調査プロットのくりかえし調査によってあきらかになるはずである。

今年度は継続調査の一環として、データの蓄積過程にある。前年度調査の結果とくらべて、樹高、胸高直径の測定値から生長量を算定するには、測定精度が十分でない。さらに調査をつづける必要がある。

ニホンザルの生息域内では、上述の施業のほか、皆伐による人工林化もすすめられている。地域内全体にわたる植生配置のありかた、施業の進行にともなう変化の動向を予測することも重要な課題となるであろうことは疑えない。ニホンザル行動範囲の確実な推定ができるのをまわって、この点に関する考察にも着手しなければならないと考える。

箱根地域個体群の分散について

○	村松 正敏 (マカック研究会)
	田中 進 (同上)
	福田 史夫 (同上)
	小林 紀子 (同上)
	岩淵 幸子 (同上)

昭和49年度、50年度の共同利用研究の報告をする。49年度は群れからの個体の分散をそれまでの継続調査として年次変動の追跡を、50年度は群れの遊動時の広がりや周年変化を知る目的で調査した。なお地理的変異の一環として、合わせて体重の測定を実施した。

方法：いずれも個体識別による直接観察による。

調査結果：(1) 群れからの個体の分散。1975年11月までの過去10年間に調査地域内に観察されたオトナのオスは106匹であった。群れに所属する数は常時平均10匹で、群れの大きさ、個体数変化に相関しなかった。5群中2群に生まれたオスの1歳までの生存率は63%、そのうち2匹を除く他の63匹はすべて出身群を離れ、他の近隣群に加入した率は73%であった。なお離脱オスのうち2匹は60km離れた伊豆半島伊豆群に加入していた。

(2) 遊動時の広がり。例年通り冬期はコンパクトな集まりをつくり、わずかに配偶関係による小さな集まりが群れから離れた。オスグループは主群に最も接近した。春期はオスグループのみがやや主群から離れがちだった。夏期、特に出産期に群れは2つに分節化する傾向に

あった。分節グループ間隔は1kmにも達した。オスグループはほとんど独立行動をとった。秋期は分節化も夏期ほどではなかったが例年よりまとまりを欠く集まりをつくっていた。

(3) 体重。オトナのオスは12kg平均、メスは9kg平均の値を得た。年齢毎の比較では、6歳と7歳、7歳と8歳が体重差が大きく、メスでは4歳と5歳が最も体重差があった。

<考察>(1) すべてのオトナのオスは群れ生活と単独生活をする。それぞれの生活期間の比は1対1である。その結果多くの群れでは群れ社会性比が1対1になるとおもわれる。

(2) 群れの分節化には交尾期の配偶者同士からなる小グループと、出産期の親密な同士からなる大分節グループが観察されていて、大分節グループの一方は30匹平均で安定していた。この傾向は、オトナのメスもオトナのメス同様10匹前後の安定したまとまりをもつ傾向を示唆している。オスとメスの体重からみた成長期は2年の差異があると考えられる。

なお今回の報告に示された数値は、研究グループの原データが大部分未整理のため、すべて村松による。

日光に生息するニホンザルの分布と生態

—ニホンザル保護管理の立場から—

○ 常田 邦彦 (東京農工大・農)

(1) 研究の目的

ニホンザル地域個体群の分布の現状とその歴史の変遷を明らかにし、あわせて環境利用等に関する生態調査をおこなう。

(2) 研究の計画

イ) 日光市、栗山村、足尾町について聞き込みによる分布調査をおこなう。

ロ) 表日光地城について毎月入山し、直接観察およびフィールドサインのチェックによる生態調査をおこなう。

ハ) イ)、ロ)と関連して土地利用の変遷を調査する。

(3) 研究の経過

哺乳類分布研究会による関東地方の中、大型哺乳類の分布調査と協力し、昭和50年8月14日～8月23日の10日間、日光市、栗山村、足尾町およびその周辺地城について、聞き込みによる分布調査を実施した。表日光地城については、昭和50年7月28日～7月31日の4日間および昭和51年1月7日～1月9日の3日間、生態調査をおこなった。また、土地利用の変遷を知るために、表日光地城の航空写真を購入し、あわせて関係官庁より資料を蒐集した。これらの結果は現在整理中である。